

# 人・ひのきしん 生・記

「点訳」その①



自身が点訳した本を、懐かしそうに眺める  
藤岡さん  
(奈良市内で)

## 六つの「点」 に刻むもの

「下 記の図書の点訳ありがとうございました 書名 天理教の信仰と思想Ⅱ 著者名……」

大和高原にある民家の一室。藤岡佐知子(74歳・都介野分教会ようぼく・奈良市)は、天理教点字文庫(コラム参照)から送られてきた「点訳感謝証」を慈しむように手に取る。全部で15枚。自身がこれまでに点訳した本の数だ。

「ずっと、点訳者になるのが夢だったのよ」

点字との出会いは昭和40年代初頭、風邪をひいた娘を病院へ連れていったときのこと。待合室で向かいに座っていた親子に目を奪われた。

「息子さんが、膝の上に本を広げて、そこに指を滑らせていてね。真っ白で何も書いていない本だった」

まだ点字が世に普及し始めて間もない時代。それが点字本だと分かったとき「すごくビックリして、感動した」。

以来、その光景が頭から離れなかった。子育てが一段落した平成2年、人づてに天理教点字文庫の存在を聞いて電話で問い合わせた。

早速、講師との手紙のやりとりによる通信教育が始まった。「最初はなかなか覚えられないし、時間はないしで『もう、やめよう』と何度も思った。先生からの手紙の封を開けるのが怖くてね」

それでも慣れるに従って、点訳の魅力に引き込まれた。

漢字、平仮名、片仮名の区別がない点字は、読み手が理解しやすいように文章を区切って打つ。この「マス空け」を正しいルールで行うには、文法を基本として、一つひとつの言葉の成り立ちや意味をしっかり捉えたうえで訳すことがポイントとなる。

「点訳を勉強していく中で、言葉の持つ力や奥深さに、たくさん気づかされた」

12年後、150通もの手紙のやりとりを経て、藤岡は晴れて点訳ひのきしん者となった。

それからというもの、日中の空き時間を見つけては、パソコンソフトを使って点訳にいそしんでいる。年に3冊できるかできないかくらいのペースだが、気がつけば、累積のページ数は5千700頁にも上っていた。

「一度点訳した本は、永遠に残る。私みたいな普通の主婦が、この世に残せるものは、これくらいだから」

藤岡の手元には、自身が訳した本が数冊残されている。付箋や書き込みでいっぱいになり、変色してボロボロになった本から、優しい手の温もりが伝わってくる。

※天理時報 2012年12月9日号より。記事の内容等は掲載当時のものです。